

2 1 世紀の日本のかたち（3 2）

－ 地域学（その2） 函館学 －



戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

1. 日ロ交流の歴史を刻む函館（箱館）のまち

函館の外れ、湯川町にロシア革命（1917年）に追われるように日本に亡命したサファイロフ（1868～1960年）と呼ばれていた一人の白系ロシア人が住んでおりました。住まいは湯川の奥の雑木林の中にあり、下見板張りの壁を緑のペンキに塗ったロシア風の木造小屋でした。ここで自家製のイチゴのジャムと野菜の酢漬けなどを売って生計を立てておりました。

戦時中、少年であった私もジャムを買いにサファイロフさんのところに行って、小さな壺に一杯分だけイチゴジャムを売って貰ったことを覚えております。母親はこれを正月用にと、大切にしまっておりましたが。



函館市の位置

私の家の在った湯川の路地で、度の強いメガネを掛け、帽子をかぶった背の高いロシア人、たまに厚いピロードのコートを着た細身の女性と連れだって歩く姿は、子供心に特異な印象を残しました。なんでもその女性はロシア語の教え子と一緒に住んでいるということでした。

サファイロフはロシアのリューリ商会の会計係で、ペトログラードから極東ロシア、シベリアに出張中ロシア革命にぶつかり、大正7（1918）年ごろ、妻子をおいて函館に亡命した人でした。

サファイロフさんは望郷の想いを胸に、昭和35（1960）年、91歳で函館に没しましたが、ロシア革命の波に翻弄された一人のロシア人の運命の糸はロシア・函館の交流史のひとつにちがいません。

函館の旧市街、函館山麓の港を見下ろす元町に、日本最初のロシア正教会の愛らしい聖堂が建っております。朝夕、よく響く鐘が鳴り、地元ではガンガン寺と呼んでこれに親しんできました。

白い壁に小さなネギ坊主と鐘楼塔をのせた緑青の屋根、ロシア風ビザンチン様式の函館ハリストス正教会は国の重要文化財（1983年指定）にもなっており、函館名所の一つです。

初代聖堂は1858（安政5）年、日露修好通商条約が調印された年に、箱館ロシア領事館付属の聖

堂として建てられたのですが、これが1907（明治40）年の函館大火により焼失してしまいました。現在の形のものは、1916（大正5）年に復活再建されたものです。



函館ハリストス正教会

ローマを本山とするカトリック系に対し、ビザンチンを本山とする東方正教会（ハリストス正教会）はギリシャにおいてはギリシャ正教会であり、これがロシア正教会につながります。35年前、私はシベリア経由でギリシャに行った折、ビザンチン美術史家の故高橋栄一さんに案内され東方正教会の聖地の一つで、現代文明を排し中世そのままの姿を保っているアトス山の修道院に数日間滞在したことがありました。実に函館ハリストス正教会の司祭たちも、一度はこの源流に滞在するとのことでした。

初めにロシア正教会を日本に持ち込んだのはロシア領事のゴスケウィッチでしたが、つづいて領事館附属礼拝堂司祭として来函した若いニコライは、函館を拠点に日本正教会を立上げ、これを日本に根付かせ広めました。日本のロシア正教会の総本山ともなっている東京神田のニコライ堂（東京復活大聖堂）は彼の力により建設されたものです。

19世紀後半から20世紀前半、ここに至るまで、ビザンチンからギリシャ、ロシア、シベリア、そして海を渡って函館、東京へと、若いロシア

の宗教者達の軌跡が読み取れるのです。

2. 函館（箱館）開港150年

箱館が函館に名称が変わったのは明治初年ですが、幕末、箱館は横浜、長崎、新潟、神戸と共に、日本を鎖国から開国へと解き放った拠点の一つです。

1849（嘉永2）年、アメリカからペリー、ロシアからプチャーチンが箱館に来港しております。

1859（安政6）年、幕府はロシア、アメリカ、イギリスなどと通商条約を結び、箱館も国際貿易港となりました。港に隣接する元町に、ロシア、アメリカ、イギリスの領事館が次々につくられ、今も明治洋風建築として極東の一点に異国の風景を残しております。昨年（2009年）は、函館（箱館）開港150年でした。

箱館を舞台にした日ロ交流史の中で欠かせない人物に、高田屋嘉兵衛（1769～1827年）がおります。淡路島（現在の兵庫県洲本市五色町）の船頭、嘉兵衛はマスト一本、帆一枚の和船を操って、蝦夷地（北海道）沿岸へ、国後（クナシリ）、択捉（エトロフ）、カムチャッカまで船足を伸ばし、北洋の漁場を開拓しました。函館山を風除けにした天然の良港箱館に、高田屋が1769（寛政10）年、北洋の富を集約する店を構えたのは当然の選択でした。

元町の港にはしっかりとした赤煉瓦の倉庫群がありますが、これは戦前、日本の北洋漁業隆盛期の名残です。

ここに幕末の豪商、高田屋嘉兵衛の和風の蔵が残っております。

幕末、江戸幕府は箱館に蝦夷地経営の拠点として奉行所を置いておりました。これもあって函館が幕末から明治にかけて日本における欧米、ロシアと交叉交流する北の拠点、舞台として、

世界史に登場してゆくのです。箱館奉行所は五稜郭に復元され、貴重な現物資料を展示して、この夏オープンしました。



箱館奉行所（五稜郭本陣）
（函館市教育委員会）

これはまた、津軽海峡を挟んで、本州（内地）からは外地と呼ばれていた北海道が、函館と青森を出入口として交流し連結してゆく時代と重なります。

3. 函館学

この夏、函館を訪れる機会があり、五稜郭の函館中央図書館に「函館学」のコーナーが設けられていることを思い出し、立ち寄ってみました。コーナーには函館市史関係の文献と並んで、真新しい「函館学」ブックレットが置いてありました。

2005年11月に開設されたこの函館市立の図書館については、私も少々縁があり、館の竣工式の祝辞でこの図書館を情報発信の北の拠点として、世界に向かってこの場所から発信すべきではないか、例えば「函館学」として、と申し上げたことがありました。

これと同様の考え方を持った方々がおられ、早速「函館学」のコーナーが開館時から設けられました。今回、「函館学」が大きく展開していることを知りました。

函館学は、函館に縁のある方々を内外から招

いて、2006年9月から2009年11月まで、既に31回、市民講座として定着していたのです。これを主催しているのが「キャンパス・コンソーシアム函館」です。

キャンパス・コンソーシアム函館とは、現在函館にある8つの大学、高専が「キャンパス都市函館」をめざし、地域の大学が「共同」して行動し、持続成長しようという試みです。

参加校は、北海道教育大学教育学部函館校、北海道大学 大学院水産科学研究院・大学院水産科学院・水産学部、公立はこだて未来大学、函館大学、函館大谷短期大学、函館短期大学、函館工業高等専門学校、ロシア極東国立総合大学函館校です。



函館山より見る函館市街
（ウィキペディアより）

「函館学」はその目玉事業にもなっております。これについては函館市も支援しています。競争流行の中、大学間競争ではなく、大学間共同という考え方にも共感を覚えます。

また、ウラジオストクに拠点のあるロシア極東大学の分校が参加しているのもユニークです。ウラジオストクは函館と姉妹都市ですが、戦前の日本人が暮らした日本人町を、私も以前学生達と調査したことがあります。

函館という歴史的にも世界と日本をつなぐ北の拠点である特異なこの場所において、グローバルに情報を集約すれば、新しい地域学が生ま

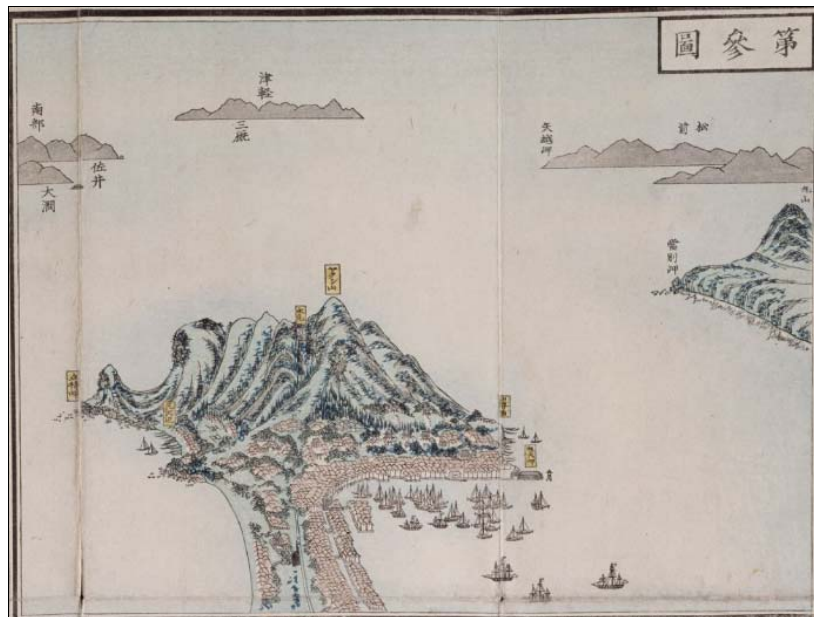
れてゆくにちがいありません。

函館市長西尾正範さんが「UEDレポート2010年夏号—地域経営—」に『人口減少時代の地域づくり』を寄稿され、函館市の成り立ち、現況、そして未来への展望を述べておられます。「函館学」の格好のテキストでもあります。

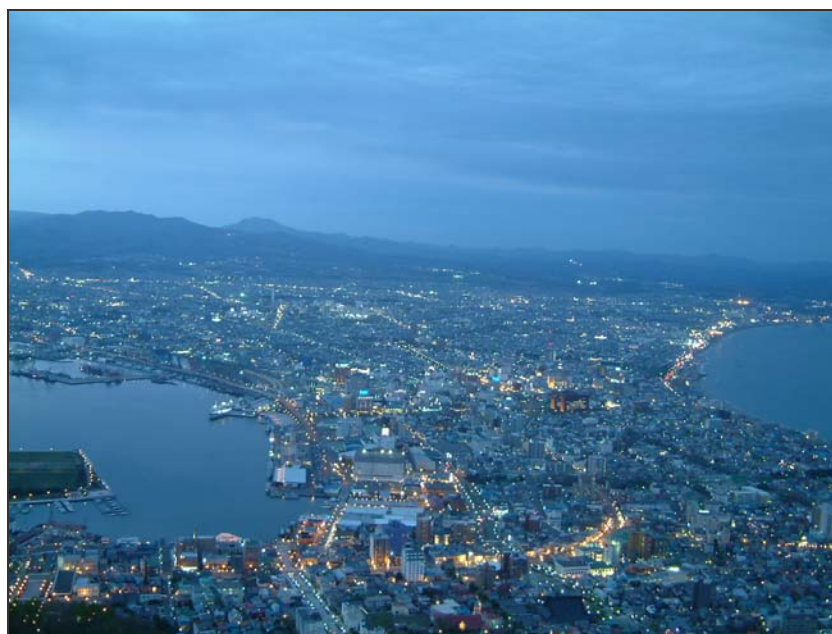
「函館学」が5年10年と持続し、充実したものにすることを期待せずにはおられません。

これはまた、北のグローバルな地域から「21世紀の日本のかたち」を浮かび上がらせることにつながると思うのです。

(2010.08.15)



幕末の函館
(「官許 箱館全図」の一部)



函館市街の夜景
(ウィキペディアより)



北方警備と諸外国との交渉の拠点であった復元された箱館奉行所（平22.7.29開館）

（左：箱館奉行所の外観

右：五稜郭タワーからの俯瞰）

（注）

文中に掲載の写真は戸沼撮影。

（参考文献）

- ・「官許 箱館全図」山崎 雄、旭岸堂、1860（万延元年）
- ・「聖山アトス」高橋栄一・辻成史、講談社、1981
- ・「ウラジオストク中心市街地の都市空間形成に関する研究（その1）」佐藤洋一・鷺見和重・戸沼幸市、日本建築学会計画系論文集No. 505、1998
- ・「ウラジオストク中心市街地の都市空間形成に関する研究（その2）」佐藤洋一・戸沼幸市、日本建築学会計画系論文集No. 522、1999
- ・「函館・ロシア その交流の軌跡」清水恵、函館日ロ交流史研究会。2005
- ・「函館学」ブックレット No. 1～No. 11、キャンパス・コンソーシアム函館、2008・2009
- ・「人口減少時代の地域づくり」西尾正範（函館市長）、UEDレポート2010夏号、（財）日本開発構想研究所、2010